ARIJIGOKU

蟻地獄

製作発表記者会見
オフィシャルレポート

4 月 7 日、都内某所で舞台『蟻地獄』の製作発表記者会見が行われました。登壇したのは、原作・脚本・演出の板倉俊之と、出演者の髙橋祐理、山口大地、天野浩成、向井葉月の 5 名。出演者 4 名は、役の衣裳での登壇となりました。

（左から）板倉俊之、山口大地、髙橋祐理、向井葉月、天野浩成

プレス関係者以外に、先行抽選に当選した一般来場者 50 名も見守る中、司会進行を務める大熊英司アナウンサーの呼び込みで、5 名が登場。まずは各自の自己紹介と意気込みを語りました。

トップバッターは板倉。大熊アナから「演出家の先生」と言われると、「そうじゃな」と言いながらふんぞり返る仕草を見せた後、「脚本・演出をさせていただきます、インパルスの板倉です。今日はちょっと鼻の中に息をするとフラフラッと何かが揺れる感覚があるんですけど、その感覚に邪魔されつつも頑張っていきたいと思います」と挨拶。大熊アナが「すみません板倉さん、意気込みをお願いします」と促すと、「成功させたいと思っております。どういう演出家として接していこうか、まだちょっとスタンスが定まっていないんですよ。敵対関係を作っていくのか、それとも仲良くやろうよ、というパターンでいくのか、これは稽古始まる前に決めないといけないですけどね」と少し悩む表情を見せました。

続いて主演の髙橋が「一度中止になってしまってすごく悔しい思いをした分、とても気合が入っております。板倉さんの理想像に少しでも近づけるように日々の稽古に励みたいと思います」と意気込みを述べると、板倉がすかさず「頼むよ、ホントね」と演出家モードでコメント。髙橋は「プレッシャーがすごいですね」と苦笑いを見せました。

カシワギ役の山口は「原作の板倉さんが演出なうえに、ビジュアル撮影の時に板倉さんから「カシワギが大好きなんですよ」と言われて、これはちょっと気合入れて、お客さんを納得させるのはもちろんなんですけど、最初に板倉さんを稽古で納得させないとな、と思っております」と、撮影時のエピソードも披露しました。

宮内役の天野は「今日は来て下さってありがとうございます」と報道陣、一般来場者それぞれへの丁寧なご挨拶から入り、板倉から「ヨン様みたいな感じ」とツッコまれながらも、「中止になってしまってから 1 年以上僕の中にこの宮内という役があるので、今やっと皆様の前に宮内として立てているな、という喜びと、このまま最後まで素敵な舞台を届けたいな、という思いが強くあります」と役への思い入れを語りました。

マフユ役の向井が「キャストの皆さんと仲良くできたらいいなと思っています」とコメントすると、板倉が可愛らしい口調で「そうだね。女子が少ないんでね」と応じて、2 人で顔を見合わせてニコニコ。山口が「とあるプロモーション企画の収録のときに、板倉さんと向井さんでめちゃくちゃ仲良くなってましたよね」と言うと、板倉と向井で「このコメント、わたしが入って変な空気にしちゃった、ごめんね」「いや、私もごめんね」「違うの、わたしなの」と突然コントのようなやり取りが始まり、2 人の間に座っていた髙橋が「このやり取りで毎回挟まれるの僕なんですよ」と困り顔を見せて会場の笑いを誘うと、板倉は「(髙橋)祐理ちゃんオチでこのコントできそうだね」とニヤリ。

大熊アナからの「かなりセリフも長いと聞いていますが……」という問いかけに、板倉は「そうなんですよ、みんな地獄を最低一回は見てもらいます」と発言。とにかく長ゼリフの多い脚本について「そこは本当にすいませんとしか言いようがない。稽古しながら削るところは削ります。一番懸念しているのは、台本もらって覚えたのに切るんかい、って陰口叩かれること。だから稽古中は、悪口を言われてないか耳をそばだてておこうかな」と心配そうな表情を浮かべると、山口がすかさず「それはないです。板倉さんありきの作品なので、どんどん削っていただいて大丈夫です」とフォロー。髙橋も「自分は舞台経験が豊富な方ではないので、このタイミングでずっと舞台上に立ち続けることができる機会をいただけたことが本当にうれしい。一言でも多く舞台上で孝次郎としてセリフを言いたい、という気持ちが強いので、もちろん不安な気持ちもありますけど、それ以上に楽しみです」と力強く発言しました。向井が「私も長ゼリフはあるんですけど、大丈夫だと思います」と言うと、板倉は「すごい心強い、すごいじゃん、さすが葉月」と再び可愛らしい口調になり、向井とニコニコ。髙橋が「なんなんですか、これ(笑)」と困惑の表情を浮かべると、大熊アナが「たぶん稽古のときもこういう感じになりますよね」と言い、山口が「そのときは髙橋くんがちゃんと止めるんだよ」と笑いながら言うと、髙橋は「助けてくださいよ(笑)」と山口

に助けを求める目を向けていました。

プレス関係者からの質問で、「稽古ではどういったコミュニケーションをとって仲を深めていこうと思っているか」と聞かれると、高橋は「板倉さんと向井さんの異様な空気のやり取りの中にうまく入り込めるかどうか不安なんですけど、お二人（山口と天野）に助けてもらいながら入れたらいいなと思います」と、先ほどからの板倉・向井コンビのやり取りに翻弄されている様子をうかがわせつつも、「僕はキャラ的に全員と関わりがあって一緒に稽古する時間も多いと思うので、そこで距離を縮められたらいいなと思います」としっかりコメント。一方の板倉からは「みんなで食べてください、って差し入れで友好関係を築くパターンもあるよね。陰口がひどくなってきたなと思った頃に僕は豚汁を作ろうと思っていて。豚汁調整ですね」と、突然の豚汁宣言が飛び出しました。

次に、舞台のみどころを尋ねられ、板倉は「この作品はサスペンス、ミステリー、バイオレンス、いろんな要素が入っていて、頭から終わりまでぎゅうぎゅう詰めなので、どこが見どころ、という感じじゃないんですが、ただのバイオレンスものじゃなく、頭脳戦やどんでん返し的な要素も入っているところ、ですかね。小説とか漫画にもなってますけど、役者さんたちの演技とか声とかで、舞台版ならではの良さが出てくれると思っています」と答えました。「笑いは入ってない？」という問いかけには、「みんなでズコー！みたいな、コントみたいな笑いはないですね。ほっこりというか、ちょっとクスッとできるようなシーンは原作にも入ってるんで、そこは生かすつもりです」と、本格サスペンス劇であることをうかがわせました。

続いて、公式ホームページで募集した質問に答えるコーナーとなりました。まずは髙橋への質問で「座長に決まったとき、一番最初に出た一言はなんですか。そのときの心境を教えてください」。高橋はこれに対して「マネージャーからこの話を聞いて出た一言は「えっ？」でした」と回答しました。「そのとき、まだ僕は舞台に一度しか出演していなくて、初舞台のときも銀髪の役だったんですけど、そのビジュアルを板倉さんが見てくださって、主演をやって欲しいと言ってくださったんです」と、主演オファーに至った経緯を髙橋が語ると、板倉も「写真を見たときに、いやオファーしてないのにもう（孝次郎を）やってるじゃん、って思ったんですよ」と、孝次郎のイメージにピッタリだったことを明かしました。

次は全員への質問で「これは蟻地獄にはまった、と思ったことはありますか」。板倉は「サバゲ―歴 10 年以上で、エアガンは増える一方で、使った金額を振り返るとつらくなるからもう突き進むしかない、と思ったときに「はまったな」と。「小さい頃の夢がかなったな」と思う日もあるし、「誰か俺を止めてくれ」と思う日もある」と、サバゲ―という蟻地獄にハマっている様を語りました。天野は「（この舞台に）これからはまっていくんだろうな」と、今作への意気込み十分な回答。向井は「乃木坂に入る前は乃木坂のファンで、生写真にたくさんお金を使ってしまった」、山口は「筋トレにはまっていた時期は、筋トレをしていないと憂鬱になるときもあったので、友達に飲みに誘われても断って筋トレしていたことがありました」、髙橋は「一時期サウナが大好きで、稽古終わりに先輩にサウナに連れて行ってもらって、週

３～４くらいで通ってた」と、それぞれハマっていたものを答えました。

続いての質問は板倉に向けて「原作は怒涛の展開なので、これを舞台にするのは難しいと思っていたのですが、一番表現するのに苦労しそうなことはどんなことですか」。これに対して板倉は「小説で書いたときは主人公目線で書いたので、情報が限定されていたんですけど、舞台になると客観になってくるので、そういうとこですかね。お客さんから見える方向が限られるとか、漫画や映像と違ってアップが使えないとか。その代わり、始まっちゃったら終わるまでぶっ続けでやるという緊張感は舞台でしかないものだと思うので、それが引き立ったらいいなと思います」と答えました。

向井へは「いつもは乃木坂メンバーといることが多いと思いますが、舞台の稽古中にメンバーと会いたいなと思うことはありますか」という質問が。向井が「今まで舞台をやってきて、稽古中は乃木坂のお仕事に行けないことも増えてくるので、現場で楽しかったこととか聞くと、やっぱり私もその場にいたかったなって思うことはありますね」と答えると、板倉が「そういう寂しい思いを少しでもさせないように、僕は乃木坂の一員のスタンスで彼女に接してるんです」と、2 人の“仲良しコント”の意図を説明しました。

そして締めの質問は、全員に「蟻地獄の主人公が 19 歳ですが、みなさんが 19 歳のときの思い出は何ですか」。板倉は「ガソリンスタンドでバイトしていて、結構評判よかったんですよ」、山口は「高校を卒業して東京に出て来た頃。当時はダンスをやっていて、全く役者になるなんて思っていなかったです」、天野は「俳優のお仕事はもうしていました。セーラームーンとかやっていた頃かな。プライベートでは自動車学校に通ったりしてました」、向井は「19 歳は 2 年前ですけど、お母さんとすっごく仲が悪かったです。それまで反抗期がなかったから、そこで来ちゃったのかな。今はすごく仲良しなんですけど、あのときは申し訳なかったな、って思います」、髙橋は「それこそ僕の 19 歳の年は、この舞台の話をもらったときなんです。だから自分の中でも運命を感じました」とそれぞれ答えました。

最後に一言ずつメッセージを求められると、板倉は「皆さんと力を合わせて面白いものに必ずしますので、ぜひ見に来て下さい」、髙橋は「一度中止になってしまったんですけど、このような形で上演できるということで、素敵なキャストの皆さんと、そして板倉さんと一緒に最高のエンターテインメントを作れるように頑張ります。このご時世に劇場に直接来て下さるということは、かなり覚悟のいる決断だと思いますので、お客様一人一人に感謝の気持ちを込めて芝居をしたいなと思います。ぜひ応援のほどよろしくお願いします」、山口は「このご時世に演劇をできるということがどういうことなのか、座組全体でしっかり考えてやらなければ、と思います。演劇にしかないパワーというのは絶対にありますので、ご来場の皆様一人一人にこちらからパワーを与えるようなつもりでやっていきたいと思います。作品自体は本当に面白いです。心拍数の上がるスリル満点のスピード感と、キャラクターの心理描写が魅力的な作品ですので、ぜひ楽しみにしていただければと思います」、天野は「小説もマンガもすごく面白くて、これが舞台になったら面白くなかったね、と言われるのは悔しいですし、舞台には舞台の面白さがあって楽しかったね、と言っていただけるようにやっていきたいと思います」、向井は「舞台を見終わった後に、す

ごい舞台だったね、と思ってもらえるような作品にしたいのでこれから頑張っていきたいと思います。会場で皆様にお会いできるのを楽しみにしています」とそれぞれ述べました。

　終始和やかなムードが漂い、5 人の雰囲気の良さが伝わってくる会見となりました。これから始まる稽古、そして迎える本番と、このメンバーで明るく前向きに乗り切って、素晴らしい舞台『蟻地獄』が見られることを期待しています。

文＝久田絢子